

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 夏秋野菜 (果菜類)の 後期管理</p> <p>(2) イチゴの 開花期まで の管理</p>	<p>(今月の作業のポイント) 夏秋野菜(果菜類)の後期管理 イチゴの開花期までの管理 レタスの育苗・初期管理 ソラマメの育苗 冬春野菜の土づくり</p> <p>ア 灌水・追肥 必要な灌水量は夏期に比べると少なくなるが、晴天が続く場合は草勢を見ながら適宜灌水を行う。特に雨よけ栽培では定期的に灌水する。 また、気温の低下とともに肥効も低下するので、液肥や速効性肥料等を用い、肥切れさせないように注意する。</p> <p>イ 整枝および摘葉 気温が低下すると生育が緩慢となるので、強い整枝や摘葉は行わず、でき 写真1 トマト葉かび病(葉裏)とトマト疫病(葉表) るだけ茎葉の確保に努める。</p> <p>ウ 病虫害防除 気温や草勢の低下に伴い、葉かび病、うどんこ病、灰色かび病、疫病などの病害が多発する恐れがあるので、圃場をよく観察し初期防除に努める。</p> <p>ア マルチ被覆 頂花房の出蕾期までに畝にマルチ被覆を行う。イチゴの株を傷めないよう丁寧に行い、被覆後も温度が高い場合はマルチの裾を畝の肩まで上げておこなどし、地温の上昇を防ぐ。</p> <p>イ ビニール被覆と温度管理 ハウスのビニール被覆は、第1次腋花房の花芽分化後、平均気温が16~17 を下回る頃が目安となる。 作型やその年の天候等により時期が異なるが、おおむね夜冷・株冷で10月中旬、普通促成で10月下旬頃である。</p>

項 目	作 業 内 容
(3)レタスの 育苗・初期管理	<p>被覆直後は、ハウス内温度が上昇しすぎないように換気に注意する。</p> <p>ウ ジベレリン処理 果柄が伸長しにくい品種(さがほのか等)では、果実が葉の陰になり着色不良になりやすいため、ジベレリン処理を行う。 処理は、頂花の出蕾直後～開花直前に、ジベレリン 10ppm を株の中心部に 5 ml 散布する。ジベレリン剤の使用は 1 花房当たり 1 回かつ、茎葉全面散布も含め栽培期間中 10 回以内(但し、果柄促進は 1 回/花房)であるため、計画的に使用する。</p> <p>エ 本圃での炭疽病拡大防止 近年は、育苗床で炭疽病が多発しており、育苗床からの罹病株の持ち込みによる本圃での感染、発病が見られる圃場がある。このため本圃をよく観察し、感染株や発病株は早期に除去するとともに、必要に応じて薬剤散布を行い、新たな感染の防止に努める。</p> <p>オ 病虫害防除 定植後から出蕾期までは、病虫害の発生の多い時期である。開花後は、ミツバチの影響などで薬剤の使用が制限されるため、出蕾期までの防除を徹底する。うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ類、タバコガ類などに注意し、発生初期の防除を心がける。</p>
	<p>ア 播種および定植 レタスの発芽適温および生育適温は 15～20 である。9 月下旬～10 月上旬に播種すると約 4 ヶ月で収穫期に達するが、この間の平均気温が 1 高いと収穫期が 7～10 日程度早まるとされる。 レタスは好光性種子であり、暗いところでは発芽が悪くなるので、覆土は必ず薄めに行う。200 穴程度のセルトレイを</p>



写真2 炭疽病による萎れ株(本圃)

項 目	作 業 内 容
(4) ソラマメ の育苗	<p>用いて播種し、発芽後は徒長を防止するため、日の当たる所で育苗する。かん水は丁寧に行う。定植苗は本葉 3 ~ 4 枚程度の若苗を使う。徒長苗や老化苗を定植すると活着が悪くなり、外葉の生育が劣って結球不良となりやすいので注意する。</p> <p>イ 追肥の施用 生育初期に肥効が不足すると、外葉が充実せず結球が劣るため、初期生育が悪かった場合は、本葉 10 枚頃と結球始期に液肥や速効性肥料で追肥する。</p> <p>ア 播種時期 ソラマメの発芽適温は 20 前後、生育適温は 15 ~ 20 である。幼苗期 (本葉 5 ~ 6 枚頃まで) は耐寒性が強いが、生育が進むと寒害を受けやすくなるため、極端な早播きを避け、平坦地では 10 月中旬頃を目安に播種する。</p> <p>イ 育苗 種子消毒されていない種子では、苗立枯病予防のため種子消毒を行う。播種は、おはぐろを下にして種子の 4 分の 3 程度を培土に押し込み、十分灌水した後、新聞紙で覆ってさらにその上からも灌水し、乾燥させないようにする。1 週間程度経過し、発芽が揃ったら新聞紙を除去する。以後、土の表面が乾いたら灌水するとともに、薄手の寒冷紗等で覆いをし、アブラムシの飛来を防ぐ。</p> <p>ウ 本圃の準備 連作すると、忌地現象やえそモザイク病、立枯病等が多発するので、ソラマメを作付けしていない圃場を選定する。作付圃場は、あらかじめ完熟堆肥や苦土石灰を施し、よく耕うんしておく。元肥は 10 a 当たり分量で、窒素 8 kg、リン酸 8 kg、加里 14kg を施用し、畝幅 120 ~ 140cm、株間 50cm 程度 (1 条) で定植できるよう畝立てする。アブラムシによるモザイク病の予防のため、シルバーストライプマルチを使用するとよい。定植適期は、本葉が 3 枚程度展開した頃であり、植え遅れないよう余裕を持って本圃を準備する。</p>
(5) 冬春野菜 の土づくり	<p>近年、肥料代が高騰している。今後、冬春野菜の本圃の準備期になるが、肥効を十分に効かせるためには、完熟堆肥等を積</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>極的に（わら堆肥及びオガクズ豚糞堆肥で1～2 t / 10a、オガクズ牛糞堆肥で2～3 t / 10a）施用し、土づくりの徹底を図ることが必要である。</p>

（作成 農林水産研究所）